

# 『古事記』の所伝のなりたちと漢籍

——仁徳天皇条の所伝をめぐって、その(一)——

榎 本 福 寿

## 一、はじめに

『古事記』は、上・中・下の三巻からなる。上巻と中巻とは、ごくかいつまんでいって、それぞれ神の世と人の世とに対応し、その間に、ひととおり明らかな区別がある。中巻からは、神武天皇にはじまって推古天皇に終わる、この間ずっと天皇の時代がつづく。中巻と下巻とは、そうして連続するけれども、そのなかに、なおやはり区別がある。西宮一民氏は、この区別を天皇のありかたの違いとみて、中巻のそれを「神道的天皇像」、下巻のそれを「儒教的天皇像」と称する。<sup>6)</sup>

『古事記』が中巻と下巻とをわかつ以上、それは、そのまま双方に違いがあることをみずからあきらかにしたものとみることができる。西宮氏の説は、その違いについての一つの解釈であるが、そこに「儒教的天皇像」というように、下巻にあつては、儒教の考えや、それをふまえた記述などのあらわれが著しい。またそのなりたちにおいて、儒

教やよりひろく漢籍の知識などが深く参与している所伝もある。下巻は、その意味で、伝承の古代からの脱皮を、それら漢籍の知識にもとづく、ないしそれをふまえる所伝をとおしてものがたろうとする観さえ呈している。

これは、しかし概観にすぎない。具体的に個々の所伝を検討し、右にあらましのべたことの確認を、ひとまず小稿のねらいとする。なお敷衍していえば、出典という直接的な関係よりは、ひろく所伝がそのなりたちに参加ないし投影させている漢籍の知識を洗いだし、それをもとに所伝のなりたちを探ろうとする、これは、ささやかな試みである。この試みも、もとより、所伝を正しく読みとおしえてはじめて意味をもつであらう。それは、小稿の試みに前提となるばかりでなく、小稿のかかげるそれ自体大きな課題でもある。

## 二、「課役」免除をめぐる所伝のかたよりと「役使」

下巻は、仁徳天皇の時代からはじまる。この時代の所伝で、いわば物語的な実質をそなえ、口火をきる位置にあるのは、国民の貧窮を「課役」免除によって救ったという次の所伝である。通例にならない、いましばらく「於是」から引用する。（引用にあたっては、印刷活字のつごうで、以下すべて新字体による）

於是、天皇登<sub>二</sub>高山<sub>一</sub>、見<sub>二</sub>四方之国<sub>一</sub>、詔之、於<sub>二</sub>国中<sub>一</sub>烟不<sub>レ</sub>発。国皆貧窮。故、自<sub>レ</sub>今三年、悉除<sub>二</sub>人民之課役<sub>一</sub>。是以、大殿破壊、悉雖<sub>二</sub>雨漏<sub>一</sub>、都勿<sub>二</sub>脩理<sub>一</sub>。以<sub>レ</sub>械受<sub>二</sub>其漏雨<sub>一</sub>、遷<sub>二</sub>避于不<sub>レ</sub>漏处<sub>一</sub>。後見<sub>二</sub>国中<sub>一</sub>、於<sub>レ</sub>国満<sub>レ</sub>烟。故、為<sub>二</sub>人民富<sub>一</sub>、今科<sub>二</sub>課役<sub>一</sub>。是以、百姓之榮、不<sub>レ</sub>苦<sub>二</sub>役使<sub>一</sub>。故、称<sub>二</sub>其御世<sub>一</sub>、謂<sub>二</sub>聖帝世<sub>一</sub>也。（下2才）<sup>(9)</sup>

この所伝には、いくつか不審な点がある。まずはじめに、四方の国々が炊の煙を發たせないほどに貧窮したというそ

の原因ないし理由である。書紀でも、かならずしもその点は分明ではないが、それでも、天候の異変などをそこに暗示するかのよう、「五穀不<sub>レ</sub>登、百姓窮乏也」(仁徳紀四年二月条)と伝える。この所伝には、そのような凶作をおもわせる手がかりすらない。「国皆貧窮」という事態は、政治を左右しかねないだけに、事実、天皇がその救済にのりだすことになったが、それだけになお一層、その事態がなにによって発生したかに全く言及していないというのは、不審というほかない。

次に、「課役」を三年も免除すれば、政治その他、たとえば宮廷生活の維持などにも、さまざまなひずみや困難が生じるはずである。これについては、宮殿が破壊し、雨漏りがするほどであったということ、これにともなう雨漏りを耐える労苦を述べるに過ぎない。不審は、そうして住生活の困難にことさらに限っている点である。書紀の記述をまた引き合に出せば、

(詔曰、自<sub>レ</sub>今以後、至<sub>三</sub>于三年、悉除<sub>三</sub>課役、以息<sub>三</sub>百姓之苦)是日始之、<sup>(衣)</sup>黻衣絺履、不<sub>三</sub>弊<sub>二</sub>尽<sub>一</sub>不<sub>三</sub>更<sub>二</sub>為<sub>一</sub>也。<sup>(食)</sup>温<sub>レ</sub>飯煖<sub>レ</sub>羹、不<sub>三</sub>酸<sub>二</sub>餒<sub>一</sub>不<sub>レ</sub>易也。削<sub>レ</sub>心約<sub>レ</sub>志、以從<sub>三</sub>事乎無<sub>二</sub>為<sub>一</sub>。是以、<sup>(住)</sup>宮垣崩而不<sub>レ</sub>造、茅茨壞以不<sub>レ</sub>葺。風雨入<sub>レ</sub>隙、而沾<sub>三</sub>衣被<sub>一</sub>。星辰漏<sub>レ</sub>壞、而露<sub>三</sub>床蓐<sub>一</sub>。(十一・296<sup>(4)</sup>)

右のように「住」に関する説明が多くを占めるとはいえ、「衣」や「食」についても、漢籍にその表現を借りてはいられるけれども、<sup>(6)</sup>閑却してはいない。生活の不如意、困難ということであれば、書紀が伝えるように、「衣」「食」「住」の全てがそこにかかわるのではないか。また、それが、現実の生活に照らしても自然であろう。古典にもまたそうした例がある。よく知られていたはずの『論語』の例では、次のようにいう。

子曰、禹、吾無<sub>三</sub>間然<sub>一</sub>矣。<sup>(食)</sup>菲<sub>二</sub>飲食<sub>一</sub>而致<sub>三</sub>孝乎鬼神<sub>一</sub>、<sup>(衣)</sup>惡<sub>二</sub>衣服<sub>一</sub>而致<sub>三</sub>美乎黻冕<sub>一</sub>、<sup>(住)</sup>卑<sub>二</sub>宮室<sub>一</sub>而尽<sub>三</sub>力乎溝洫<sub>一</sub>。禹、吾

無間然矣。(泰伯第八)

孔子が文句のつけようがないと禹をたたえたなかでは、衣食住のそれぞれに逐一言及するが、『史記』では、それを、禹の事蹟にそくして、いくぶん簡略にしたかたちで次のようにいう。

禹傷先人父鯀功之不成受誅、乃勞身焦思。居外十三年、過家門、不敢入。薄衣食、致孝乎鬼神、卑宮室、致費於溝澮。(夏本紀第二)

父の鯀が成しとげえなかった治水事業を引きつぎ、まさに刻苦してそのことに専念するさまをのべるなかで、「衣食」を一つに括っている。一括しながらも、しかし、なおそれを切りすててはいない。日常生活をきりつめるということのなかでは、やはり「衣」「食」「住」のすべてがそこにかかわるという、それなりに当然のあらわれをそこに見ることがができる。こうした古典の例や書紀の記述と比べると一層あきらかであるが、この所伝には、著しいかたよりがある。「住」に限るばかりでなく、それにかかわる生活の不如意を「雨漏」にそくしてたぶん強調するといった、ことさらな意図がそこにはある。これまた不審といわざるをえない。

一方、この所伝の結びにも不審がある。所伝を、その筋の展開にそくして実質的にしめくくるのは、「百姓之笑、不苦<sub>レ</sub>役使<sub>二</sub>」という一文である。それで、はたして所伝の発端にいう「国皆貧窮」にただしく照応するであろうか。煙が発たないほどに貧窮しているというのであれば、書紀が、三年の「課役」免除後に「是後、風雨順<sub>レ</sub>時、五穀豐穰。三稔之間、百姓富寛。頌德既滿、炊烟亦繁」(十一・296)と称える状態の方がはるかにふさわしい。少くとも、最後を「不<sub>レ</sub>苦<sub>二</sub>役使<sub>二</sub>」と結ぶ必然性は、所伝の発端にはない。

右に不審をいくつか指摘したけれども、それらをたてに、この所伝に矛盾や内容上の不整合があるというのではな

い。不審は、内容にかたよりがあるということ、もっぱらこのことによる。不審として指摘したあれこれは、そのかたよりのいわばあらわれであつて、したがつてこの所伝がよせる関心と分ちがたうかわるであらう。たとえば不審の第三に指摘したとおり、この所伝は、結びを「百姓之榮、不<sub>レ</sub>苦<sub>二</sub>役使<sub>一</sub>」としめくくるが、「役使」を結びにもちだすことはもとより、「百姓之榮」と「不<sub>レ</sub>苦<sub>二</sub>役使<sub>一</sub>」という、もともと必然的な関連をもたない二つを結びつけ、一つの事態の、あたかも前者を一般とし、後者をその個別とする関係としてまとめることなど（八一頁参照）、「役使」によせる強い関心をおのずから示唆するであらう。不審の第二にしても、宮殿がこわれ、雨が漏るなどというその事態は、たとえばさきに引用した禹の事蹟になぞらえれば、「卑<sub>二</sub>宮室<sub>一</sub>」がそれにあたが、禹がそうして積極的に治水事業に力をつくしたという伝えとは違い、これはただその不如意の事態を耐えるだけとはいへ、その事態のもとをただせば、所伝では「課役」とするけれども、「役使」がその実質である労役を免除するという積極的なはからいがある。「課役」をのちに「役使」にかえるというそのこと、なおまた、この所伝が委細に伝える不如意の事態やそれに耐える涙ぐましいまでの努力を、結果的に、ほかならぬその「役使」を免除するはからいが強いといった筋の展開などにそくしていえば、ともかくも、「役使」なくしてこの所伝は成りたないといつても過言ではない。所伝は、しかも、ここにやまを置く。かくて所伝の結びとそのやまとが「役使」とのかかわりにおいてある以上、さかのぼつて、そもそもこの所伝のはじめに「国皆貧窮」という事態の、さきに不審の第一としてあげたその理由ないし原因にしても、ここに見とおしをいへば、この「役使」がそこに深くかわるであらう。

この見とおしについてはのちに確めるとして、右に言及したように、所伝が「課役」を「役使」にそくして述べるということ、逆にいえば、実質的に「役使」をめぐる展開するにもかかわらず、なお「課役」とすること、ここに

は、なにかそのようなかたちをとらせる事情があったことを思わせる。いま、この問題にすこしく立ちいるうえで、ひとわたり「課役」をみるに、令につかう用語であるが、たとえばその日本の古い注釈では、これについて「課者、調及副物、田祖之類也。役者、庸及雜徭之類」(『令義解』卷三「賦役令」)「凡田有永旱虫霜、不熟之处、国司檢<sub>レ</sub>実、具録申<sub>レ</sub>官、<sub>レ</sub>損<sub>二</sub>七分、免<sub>二</sub>祖調、損<sub>二</sub>八分以上、課役俱免<sub>一</sub>」の条)という。令によつて、そのあらわす内容にいくぶん違いがあるとはいへ、<sup>6)</sup>「課役」が、国民が税として貢納する物と労役(庸はそれを物におきかえたもの)との二つをさすことにかわりはない。令の用語として「課役」をとらえたばあい、その免除は、右のように最もはなはだしい災害の救済措置として、「国皆貧窮」との対応のうえでは、整合性をもつ。それにしても、問題は、この所伝が、おもてむき「課役」といいながら、もっぱら「役」をめぐる展開し、その二つのうちの一方の「課」には全く触れない点である。このかたよりについて、たとえば、「役」を代表として挙げ、「課」はそれからの類推にゆだねたとみなしうる余地はない。「課」と「役」との、おのおのその税としての性格の違いを無視して、一方をもつて他を類推させる必然性は、もとより、所伝にはない。また、そもそも類推というかたちをとるならば、たとえば後にしめす漢籍の例にあるように、そして「国皆貧窮」との対応のうえでも、むしろ「課」を取りあげるほうが自然であるう。

かたよりは、つまりは、「役使」をめぐる展開するというこの所伝の基本的な筋にかかわる。この事實は、不審の第二・三として指摘したとおり、動かしがたい。一方、「課役」については、これを「役使」にかえうるほど、かえてしまえば筋が一層とおりのやすくなるほど、ことほどさように、この所伝の筋にはそぐわない。したがって、この所伝のそもその成りたちに、いまのかたちでこの「課役」があったのか、きわめて疑わしい。というより、この所

伝の成りたちにさかのぼれば、「課役」などという言葉など―令の用語であるから、この点でも―本来なく、ごくかいつまんでいって、たとえば「役使」をめぐる展開するというかたちをとっていたのではないか。そうして冒頭にしても、さきに見とおしとして述べたとおり、そこに「国皆貧窮」という事態の、それが発生した理由ないし原因に「役使」がかかわっていた可能性がきわめて強い。もとより、推測の限りではないが、そのかわりをここに改めてあつければ、「国皆貧窮」という事態は、過度な「役使」がもたらしたところの、人々の疲弊をさすであろう。「役使」をめぐる展開という筋だてもまた、ここに淵源する。すなわち、「役使」が「国皆貧窮」という事態をまねいたがために、まずはこれを免除する。この結果、労役の供給がとだえる。これ以降の、宮殿がこわれて雨漏りがしても、まったく修理しないばかりか、それにともなう生活上の辛苦をすすんでひきうけるといった一連の展開は、労役の供給杜絶という異常事態をめぐる、いわば物語的な誇張であらう。かくて、「役使」の免除にふみきり、かつまたそれにともなう生活の辛苦をたえぬくということ、所伝は、ここにやまをおく。人民がにぎわいをとり戻したのち、その繁栄にそくして「不<sub>レ</sub>苦<sub>二</sub>役使<sub>一</sub>」とむすぶ。結末また、発端・展開をうけ、「役使」をめぐるこの所伝のしかるべきありかたにそう。

右のように、この所伝の「課役」を「役使」におきかえてみると、さきに指摘した不審は、ほぼ解消する。内容のうちでも、それで矛盾なく通じる。この観点にたてば、「課役」の免除とは、とりもなおさず「役使」の免除をさし、「国皆貧窮」という事態をまねくそれこそ大規模な「役使」の中止を、その実質的な内容とする。宮殿の修理をみあわせるということも、そのような「役使」免除の一環、いわばそれに付随する必然的な措置となる。もちろん、これは一つの見方に過ぎない。さて、この見方を確認するうえで、次に二つの点について考える。その一つは、右にいう

ところの「役使」があつたことの裏づけ、もう一つは、その「役使」を「課役」とすることの理由づけである。

### 三、所伝のなりたちと「役使」

はじめに「役使」があつたことの裏づけを探ってみるに、それにあたる記述が記紀ともにたしかにある。すなわち、まず書紀では、十一年四月条の水利灌漑事業を興す詔のあと、同年十月条に難波堀江、茨田堤、十二年十月条に山背大溝、十三年九月条に河内茨田屯倉、同年十月条に和珥池、横田堤、十四年十一月条に猪甘津の小橋、同年是歳条に京中の大道、感玖の大溝など、いくたの造築灌漑事業をやつぎばやに興したと伝える。書紀は、これら一連の事業を、三年の「課役」免除の所伝の直後に伝え、なおまた、それら事業の最後をしめくくる十四年「是歳条の大溝掘さく事業を伝える記述では、その大溝によつて新たに「四万余頃」の田を開墾できたといい、その末尾を「故其処百姓寛饒之無凶年之患」<sup>(8)</sup>（十一・300）と結ぶ。なるほど、一連の事業の完成によつて得た恩恵は大きいに違いない。けれども、それを、十一年の詔のあと、わずかに三年ほどの短期間になしとげたと伝えるが、事業規模の大きさから推しはかつて、人々に相当過酷な負担を強いたことも、これまた察するにあまりある。

大規模な土木事業が民の疲弊をまねくというのは、歴史がしばしばこれを伝える。書紀には、孝徳天皇の大化三年の「是歳」の記述に、

工人大山位倭漢直荒田井比羅夫、誤穿溝瀆、控引難波。而改穿疲勞百姓。（二五・241）

右の所伝があり、これについては、諫言をたてまつる者がいて、天皇は「妄聴比羅夫所詐、而空穿瀆、朕之過



也。」とそれを認め、「即日罷役。」とある。また斉明天皇の時代の、天皇の「時好興事」という土木事業にしても、  
廻使<sup>ニ</sup>水工穿<sup>レ</sup>渠。自<sup>ニ</sup>香山西<sup>一</sup>、至<sup>ニ</sup>石上山<sup>一</sup>。以<sup>ニ</sup>舟二百隻<sup>一</sup>、載<sup>ニ</sup>石上山石<sup>一</sup>、順<sup>レ</sup>流控引、於<sup>ニ</sup>宮東山<sup>一</sup>、累<sup>レ</sup>石為<sup>レ</sup>垣。時  
人謗曰、狂心渠。損<sup>ニ</sup>費功夫<sup>一</sup>、三万余矣。費<sup>ニ</sup>損造<sup>レ</sup>垣功夫<sup>一</sup>、七万余矣。官材爛矣、山椒埋矣。又謗曰、作<sup>ニ</sup>石山丘<sup>一</sup>、  
随<sup>ニ</sup>作自破<sup>一</sup>。若掘<sup>ニ</sup>未<sup>レ</sup>成之時、  
作<sup>ニ</sup>此謗<sup>一</sup>乎。（二六・263）

時人の誹謗は、あるいは誇張をまじえているにしても、それなりに事実をうがったものであったはずで、人々のそれ  
によるついえがいかにかに大きかったかを知り手懸りとなるであろう。ちなみに、これより二年あとの斉明天皇四年十一  
月、蘇我赤兄は有馬皇子に謀反をそそのかすが、その赤兄のかたつたなかにも、右の土木事業を天皇の失政として次  
のように指摘する。

天皇所<sup>レ</sup>治政事、有三失<sup>ニ</sup>矣。大起<sup>ニ</sup>倉庫<sup>一</sup>、積<sup>ニ</sup>聚民財<sup>一</sup>、一也。長穿<sup>ニ</sup>渠水<sup>一</sup>、損<sup>ニ</sup>費公糧<sup>一</sup>、二也。於<sup>ニ</sup>舟載<sup>レ</sup>石、運積  
為<sup>レ</sup>丘、三也。（二六・267）

さきの比羅夫が興した灌漑事業はもとより、右の斉明天皇による土木事業にしても、仁徳天皇による一連の事業には、  
その規模においてはるかに及ばない。それを、しかも三年ほどの短期間にやり遂げたとすれば、はるかに大きいとい  
えに人々が苦しんだとみるのが、歴史にかんがみる限り、もつとも自然な見方であろう。

一方、『古事記』では、その書紀の一連の所伝にはほ相当する水利土木事業を、系譜記事の直後に、一括して次の  
ように伝える。

又役<sup>ニ</sup>秦人<sup>一</sup>、作<sup>ニ</sup>茨田堤及茨田三宅<sup>一</sup>、又作<sup>ニ</sup>丸邇池・依網池<sup>一</sup>、又掘<sup>ニ</sup>難波之堀江<sup>一</sup>而通<sup>レ</sup>海、又掘<sup>ニ</sup>小椅江<sup>一</sup>、又定<sup>ニ</sup>墨江  
之津<sup>一</sup>。

書紀とは、取りあげかたに違いがある。けれども、これはこれで、書紀の所伝とたがいには照応し、仁徳天皇の時代に水利土木事業が行なわれたことを文獻的にうらづける。なおまた、その照応は、書紀の所伝がそうであつたように、それら一連の事業の「国皆貧窮」とのつながりすら暗示する。

かくて、「役使」があつたことの裏づけについては、記紀双方の記述にその明証をうる。けれども、それと「課役」免除の所伝とは、記述のうえでは、ただちに結びつかない。書紀では、既述のとおり、「役使」に相当する一連の記述は、「課役」免除の所伝のあとに位置する。この位置にあつては、一連の記述は、「課役」免除の所伝をひきついで、その延長上に、そこに聖帝とたたえる仁徳天皇のその偉業をものがたるものとしての意味あいをつよくおびる。

『古事記』にしても、双方の所伝は、おのおの別個独立のかたちをとるかにみえる。注釈書また、そうして別個の所伝とみなすのが例である。しかしながら、双方の結びつきを示唆する徴候がないわけではない。その第一は、「役使」の所伝の直後に「於是」を介して「課役」免除の所伝がつづくという点である。「於是」の用法として、おもには、これに前後する事態を因果ないし継起的な関係において仲介するはたらきがある。同じ仁徳天皇条の例では、

爾黒日亮、令<sub>レ</sub>大<sub>ニ</sub>坐其国之山方地<sub>ニ</sub>而獻<sub>ニ</sub>大御飯<sub>一</sub>。於<sub>レ</sub>是、為<sub>レ</sub>煮<sub>ニ</sub>大御羹<sub>一</sub>、採<sub>ニ</sub>其地之菰菜<sub>一</sub>時、（三ウ）

爾其倉人女、聞<sub>ニ</sub>此語言<sub>一</sub>、即追<sub>ニ</sub>近御船<sub>一</sub>、白之状、具如<sub>ニ</sub>仕丁之言<sub>一</sub>。於<sub>レ</sub>是、大后大恨怒、載<sub>ニ</sub>其御船<sub>一</sub>之御綱柏者、悉投<sub>ニ</sub>棄於海<sub>一</sub>。（五オ）

前者は主語を同じくする行為の相関、後者は主語を異にする事態の相関というように、そのありかたは区別とはいへ、いずれにせよ、「於是」がその前から後への行為や事態などの展開を仲だちしていることにかわりはない。この

「於是」のはたらきにそくして、いま問題とする「役使」の所伝と「課役」免除の所伝とのかわりを捉えれば、おのずから、前者から後者へという筋の展開を、たとえば右にあげた後者に並ぶものとして、そこにたどることができる。

なおまた徴候の第二として、内容のうえでも、両者はたがいに結びつく。すなわち、「課役」免除の所伝のはじめに「天皇登高山、見四方之国」という以上、この「四方之国」は、「高山」から望んで視野のうちにおさまる国々をさすはずであるが、「高山」の所在地が不明であるから、どこと特定はできないものの、常識的にみれば、「難波之高津宮」の周辺ということになり、「役使」の所伝にいう「茅田・丸邇・依網・難波・小椅・墨江」などの水利土木事業を興したという地域にほぼ重なる。しかし、所伝の展開にそくしていえば、「高山」にしても、特定の山などではなく、これにさきだつ「茅田」以下の地域で水利土木事業を興したという所伝をうけて、それに徴用された人々の所在地域、つまりは「四方之国」を望見できる山として、むしろ積極的に抽象的なかたちでその高さを強調したものであつたらう。

さて、右の表現や内容における部分的な徴候のほかに、大局的にも「役使」の所伝と「課役」免除の所伝とが一つのもとまりにおいて結びついていることを示す徴候がある。それは、「役使」の所伝にさきだち、これと組をなすかたちで部曲を定めたと伝えるが、その冒頭の「此天皇之御世」が、「課役」免除の所伝の末尾の「故、称其御世、謂聖帝世一也」と互いに首尾の呼应をなりたてさせている点である。ほぼ同じ首尾の呼应を、崇神天皇条の所伝にみることができる。ここにその例をひきあいに出してみるに、系譜記事の直後に、まずは「此天皇之御世、役病多起、人民為尽」（中22才）という書き出しで始まる。この異常事態も、大物主神の意によるというその原因が明らかとなり、

その意にしたがい大物主神はじめ諸神を祭ることによって終息する。その末尾には、「因<sub>レ</sub>此（祭祀）而役氣悉息、國家安平也」（中23オ）とある。これにちなむ補足記事のあとに、

又此之御世、大毘古命者、遣<sub>三</sub>高志道<sub>一</sub>、其子建沼河別命者、遣<sub>三</sub>東方十二道<sub>二</sub>而令<sub>レ</sub>和<sub>三</sub>平<sub>二</sub>其麻都漏波奴人等<sub>一</sub>。（中23ウ）

右の書き出しで始まる建波邇安王の謀反をめぐる所伝があつて、つづいて乱平定のてん末を伝えたあと、これを次のように結ぶ。

故、大毘古命者、隨<sub>三</sub>先命<sub>二</sub>而罷<sub>二</sub>行高志国<sub>一</sub>。爾、自<sub>三</sub>東方<sub>二</sub>所<sub>レ</sub>遣建沼河別与<sub>三</sub>其父大毘古<sub>二</sub>共往<sub>二</sub>遇于相津<sub>一</sub>。故、其地謂<sub>三</sub>相津<sub>二</sub>也。是以、各和<sub>三</sub>平<sub>二</sub>所<sub>レ</sub>遣之國政<sub>二</sub>而覆奏<sub>一</sub>。爾、天下太平、人民富榮。於是、初令<sub>レ</sub>貢<sub>三</sub>男弓端之調<sub>一</sub>、女手末之調。故、称<sub>三</sub>其御世<sub>一</sub>、謂<sub>下</sub>所<sub>レ</sub>知<sub>三</sub>初国<sub>二</sub>之御真木天皇<sub>一</sub>也。（中26オ）

大物主神のたたりをめぐる所伝と右の所伝とあわせ、それらにおける首尾の呼応を示すと次のようになる。

此天皇之御世（大物主神のたたりをめぐる所伝）、因<sub>レ</sub>此而役氣悉息、國家安平也。

又此之御世（建波邇安王の謀反をめぐる所伝）、爾、天下太平、人民富榮。故、称<sub>三</sub>其御世<sub>一</sub>、謂<sub>下</sub>所<sub>レ</sub>知<sub>三</sub>初国<sub>二</sub>之御真木天皇<sub>一</sub>也。

仁德天皇条でも、首尾の呼応は右に一致する。すなわち、

此天皇之御世（前段の曲部の設置、土木事業の所伝と、それにとまなう後段の「課役」免除をめぐる所伝）、是以、百姓之榮、不<sub>レ</sub>苦<sub>三</sub>役使<sub>一</sub>。故、称<sub>三</sub>其御世<sub>一</sub>、謂<sub>三</sub>聖帝世<sub>二</sub>也。

いずれも「此天皇之御世」ではじまり、その時代の直面した難局を打開して国家・人民を繁榮に導くといった筋だて

から成る。なおまた、所伝の最後を、同じように時代をたたえることばでむすぶ。この一致は、恐らく偶然ではない。崇神・仁徳兩天皇を、内容こそ違え、同じように仰ぐべき理想的な為政者とする把握が、それをあらわす所伝の構成に一致をもたらしたのではないか。『古事記』の序文では、その把握は、

覺<sub>レ</sub>夢而敬<sub>ニ</sub>神祇。所以称<sub>ニ</sub>賢后<sub>一</sub>（崇神）。望<sub>レ</sub>烟而撫<sub>ニ</sub>黎元<sub>一</sub>。於<sub>レ</sub>今伝<sub>ニ</sub>聖帝<sub>一</sub>（仁徳）。

右のような対句構成の記述にたしかなあらわれをみせる。

右の崇神天皇条の所伝との類縁に徴して、仁徳天皇条の所伝は、構成上、ここに次のようにまとめることができる。すなわち、大局的には「此天皇之御世」にはじまり「故、称<sub>ニ</sub>其御世<sub>一</sub>、謂<sub>ニ</sub>聖帝世<sub>一</sub>也」と結ぶ、そうした首尾の呼応をそとわくとして、その内部は、部曲を定めたという所伝を冒頭にすえ、これにつづく「役使」の所伝から「於<sub>レ</sub>是」を介して「課役」免除をめぐる所伝へと展開するといった、あらまし以上のような構成からなりたつ。さて、この構成の限りでも、「役使」の所伝と「課役」免除の所伝とのかたい結びつきは明らかであろう。もとより、その両者は、内容のうえでも上述のとおり分ちがたい結びつきにある。これを要するに、「役使」の所伝から「課役」免除の所伝へと展開するその筋の流れにおいて、二つは一つの所伝としてまとまりを成していたということである。

#### 四、なぜ「課役」なのか、またその「役使」とのかかわり

この所伝は、右のように、いわば「役使」を発端とする。展開また、実質的にはその「役使」に大きくかわるだけに、そこにおのずから期待される「役使」ではなく、「課役」として、これをおしとおしているという事実は、こ

これはこれで「課役」への強いこだわりを示唆するであろう。「国皆貧窮」との対応はそれとして、どのみちこの所伝の主題にかかわるであろうが、さしあたっては、「課役」にまとを絞って考察をこころみる。

前述のとおり、令では、この「課役」の免除について、自然災害をこうむった被害者救済の制度として規定する。これが、儒教の考えにのっとっていることは著しい。条文自体、唐令の借用である。

諸田有<sub>二</sub>水旱虫霜為<sub>レ</sub>災処<sub>一</sub>、十分損<sub>二</sub>四分已上<sub>一</sub>、免<sub>二</sub>租<sub>一</sub>、損<sub>二</sub>六已上<sub>一</sub>、免<sub>二</sub>租調<sub>一</sub>、損<sub>二</sub>七已上<sub>一</sub>、課役俱免。〔唐令拾遺〕「賦役令第二十三」

こうした罹災者の救済は、かの地にあつては古くから行なわれていて、その伝統にねざす。たとえば史書では、古く『漢書』に次のような記述がある。

詔曰、關東、今年穀不<sub>レ</sub>登、民多困乏。其令<sub>二</sub>郡国<sub>一</sub>、被<sub>レ</sub>災害<sub>一</sub>甚者、毋<sub>レ</sub>出<sub>二</sub>租賦<sub>一</sub>。江海陂湖園地、属<sub>二</sub>少府<sub>一</sub>者、以假<sub>二</sub>貧民<sub>一</sub>、勿<sub>二</sub>租賦<sub>一</sub>。下略（元帝紀・初元元年夏四月条）

これに類する例は、『漢書』のなかだけでも少なくないが、ずっと降って、『隋書』には、すでに右の令の条文にかような例のような例を伝える。

秋七月壬申、詔、以<sub>二</sub>河南八州水<sub>一</sub>、免<sub>二</sub>其課役<sub>一</sub>。（高祖紀・開皇十八年条）

用例は、令の条文に示すとおり、周期的にみまわれる自然災害の救済が多くを占める。制度として対応する必要も、現実におこるその被害の多さによるであろうが、また一方、人為的な原因によって貧窮した民の救済を伝える次のような例もある。

承<sub>二</sub>孝武奢侈余敝師旅之後<sub>一</sub>、海内虚耗、戸口減半、光（霍光）知<sub>二</sub>時務之要<sub>一</sub>、輕<sub>二</sub>絲薄賦<sub>一</sub>、与<sub>二</sub>民休息<sub>一</sub>。（『漢書』

## 昭帝紀「贊」

これは、孝武帝の奢侈による弊害や外征後の、天下が疲弊し、人口も半減するほどの深刻な事態にさいして、大將軍霍光が、この時局になすべき要務を知り、夫役を軽くし租税を減らすなどの手だてを講じて人々を救済したという、この限りでは霍光の功績をたたえたものとなるが、これにさきだつ「成王不疑周公」、孝昭委任霍光、各因其時一以成名。大矣哉。」という前置きで、成王を孝昭帝に、霍公を周公にそれぞれなぞらえ、りっぱな臣下を任用した帝の偉大さをたたえたあと、その臣下霍光の功績に言及したくだりである。ここには「課役」ということばはないけれども、さきの自然災害にともなう救済の制度やその事実の記録といった例とは違い、所伝のかたちをとるうえに、内容についても、その「知時務之要」といい、「課役」にあたる「繇賦」のその輕減によつて貧窮を救済することといい、仁徳天皇の所伝は、これにあきらかに連なる。

そうして右に霍光を周公になぞらえるとおり、霍光のその功績は、儒教の理想にあてはまる。この点にそくして、なおもう一つ別の例を次に示す。為政者の理想をめぐる孔子と哀公との問答を伝える『孔子家語』の一節である。

哀公問政於孔子。孔子対曰、政之急者、莫大乎使民富且寿也。公曰、為之奈何。孔子曰、省力役、薄賦歛、則富矣。敦礼教、遠罪疾、則民寿矣。公曰、寡人欲行夫子之言、恐吾国貧矣。孔子曰、詩云、愷悌君子、民之父母。未有子富而父母貧者也。〔『孔子家語』卷三〕

孔子は、哀公の問いに対して、政治の急所が人々を富ませ長生きさせることにあると指摘したうえで、人々を富ませる手だてとして、「課役」の減免を説く。その説を実行すれば、国が貧しくなるとの哀公の反問に対して、詩を引き、為政者は人民の父母であり、子である人民が富んでその父母が貧しいことなどかつてなかったと答える。<sup>13)</sup>

孔子は、「政之急」として、人民を富ませることとが生きさせることとの二つを指摘する。けれども、富ませることとその手だてにさきに言及し、哀公もまたそのことについて反問し、後半がそれをめぐって展開するように、全体をとおして、人民を富ませることのほうに重点をおく。さて、その人民を富ませる手だてとして、「課役」の減免をあげる。しかも、哀公の懸念にそくしていえば、それがもたらす国の「貧」、また孔子のことばでは為政者の「貧」、いずれにせよ、ここに、「課役」の減免にとまらぬ負の側面にまでたちいて言及している点は、注目にあたいる。負の側面とはいっても、その実質は、孔子が明確に説くところ、為政者にとっては、かれが人民の父母であり、したがってその人民の富は同時にみづからの富でもある関係上、ひっきょう、富となんらかわりのない。かく「課役」の減免が人民を富ませる限り、それがもたらす為政者の「貧」は富に等しく、もとより、犠牲とは無縁である。仁徳天皇の所伝で、「課役」を免除したのち、これにともなう生活上の不如意、いわば「貧」を天皇がすすんでひきうけ、これに耐えるというのも、こうした考えに恐らくはねざすであらう。

げんに、右に引用した『家語』の一節のうち、哀公の「貧」をめぐる問いかけに対して孔子が答えた「未<sup>レ</sup>有<sup>ニ</sup>子富而父母貧者<sup>ニ</sup>也」というくだりを、書紀は、「課役」免除の所伝のうちに借用する。すなわち、「課役」の三年間の免除によって人々がにぎわいをとりもどした後に、皇后は「宮垣壞而不<sup>レ</sup>得<sup>レ</sup>脩、殿屋破之衣被<sup>レ</sup>露、何謂<sup>ニ</sup>富乎。」（十一・297）と問いかけるが、これに対する仁徳天皇の答への、

今百姓貧之、則朕貧也。百姓富之、則朕富也。未<sup>レ</sup>有<sup>ニ</sup>百姓富之君貧<sup>ニ</sup>矣。（同上）

右に傍線を付した部分がそれである。『古事記』の所伝には、そうした辞句におよぶ借用部分はない。書紀とも別のかたちをとるけれども、筋だての基本については、右に指摘したとおり、『家語』の所伝と彼此たがいに照応する。



その貧富をめぐる展開に、「役使」は、もとよりそぐわない。かつまた人民の貧窮を救済すること、このことにしても、「課役」の免除をその手だてとする伝統がある。いわば、「課役」の免除は、所伝が貧窮を正面きって取りあげたことにともなう、そのおのずからの展開においてあるといつても過言ではない。

かくて、右の検討から、「役使」と「課役」とが、それぞれに、その然るべきかたちで所伝のなりたち、ないしその展開に参与していることは明らかであろう。問題は、その二つのかかわりである。「役使」については、さきに述べたとおり、具体的にそれにあたる水利土木事業を各地で興したというように、そもそもこの所伝の発端をなす。これにつづく貧窮とその救済をめぐる展開においても、救済の手だてをかりに現にある「課役」にかえて「役使」の免除としたところでなんら支障ないばかりか、そうすれば一層筋がとおりやすくなるといった、そのようにあるべきものとして、所伝に深く結びつく。救済後の、所伝を実質的にしめくくるところでも、「不<sub>レ</sub>苦<sub>二</sub>役使<sub>一</sub>」と結ぶ。所伝にしめる、そのおのおののありかたにおいて、恐らくはこの所伝のそもそもの成りたちにまで派るのではないか。

一方、「課役」については、それが令に使うことばであるということ、このこと一つとってみても、古くは派れない。くわえて、貧窮をこの「課役」の免除によって救済するということ、どこまでも推測の域をでないが、あるいはみずから貧に耐えるということも含め、これは、さきに示したように儒教の考えにねざす。どのみち、漢籍の知識をふまえているはずであるから、これまた古くは派れない。これらが今ある所伝のかたちをとるには、儒教の知識をもとに所伝が新たな装いをこらすさいに、その装いにもなって、恐らくは古く派る「役使」をめぐる筋のなかに参入していったというのが、そのいきさつではなかったか。

## 五、文章、すなわち漢文としての整い

さて、右にこころみた推測はそれとして、少くとも、この所伝のなりたち、それもその根幹に漢籍の知識が参与していること、これだけは疑いない。この点を手がかりに、ここにこの所伝の文章をみるに、全体の筋のはこびあるいは個々の表現にしても、漢籍の知識の参与をともしう内容と、いわばうちあうかのようなあらわれをみせる。こころみに、所伝の展開にそくして、その筋だての基本的な部分をいくぶん選択を加えたうえで取りだしてみると、次のようにまとめることができる。

序——此天皇之御世、(部曲の設置) 又役<sub>二</sub>秦人<sub>一</sub>、作<sub>二</sub>茨田堤及茨田三宅<sub>一</sub>。(以下略)

前<sub>一</sub>——於<sub>レ</sub>是、登<sub>二</sub>高山<sub>一</sub>、見<sub>二</sub>四方之国<sub>一</sub>、於<sub>二</sub>国中<sub>一</sub>、烟不<sub>レ</sub>発。(国皆貧窮)

後<sub>一</sub>——後、見<sub>二</sub>国中<sub>一</sub>、於<sub>レ</sub>国、満<sub>レ</sub>烟。

前<sub>二</sub>——故、悉除<sub>二</sub>人民之課役<sub>一</sub>。

後<sub>二</sub>——故、(為<sub>二</sub>人民富<sub>一</sub>) 今科<sub>二</sub>課役<sub>一</sub>。

前<sub>三</sub>——是以、大殿破壊、悉雖<sub>二</sub>雨漏<sub>一</sub>、都勿<sub>二</sub>脩理<sub>一</sub>。(下略)

後<sub>三</sub>——是以、百姓之榮、不<sub>レ</sub>苦<sub>二</sub>役使<sub>一</sub>。

結——故、称<sub>二</sub>其御世<sub>一</sub>、謂<sub>二</sub>聖帝世<sub>一</sub>也。

まず「序」と「結」とが、仁徳天皇の「御世」をものがたる所伝としてかたりはじめ、かたりおさめるというかたち

で対応する。各地で水利土木事業を興したというその「序」をうけて、これをめぐる具体的な展開にうつる。ここでは、前段と後段とに分かれる。その「前」と「後」とは、たがいに対応的な関係にある。すなわち、ともに三つのまとまりからなり、それらが、同じ助辞を介して同じように展開する。そのおのおのは、たがいに、(一)視覚によってとらえた事態、(二)それに対する措置、(三)その結果というように内容のうえでも対応する。このなかには、原文にそくしていえば、たとえば「前二」の「見四方之國」と「於國中、烟不<sub>レ</sub>爇」とあいだに「詔之」があつて、その天皇のことばが「前二」までつづき、かたちのうえでは、たがいの対応を破るところがある。それも、しかし、視覚でとらえた事態を会話文にひきうつしてあらわすか、地の文であらわすかの、わずかにあらわしかたの違いでしかない。筋の展開そのものは、会話文のなかではあるけれども、なおやはり事態からそれに応じた措置というように同じかたちをとる。さらに「前二」まで「詔之」のうちにありながら、「前三」へそれが展開するについては、「詔之」というそのことではなく、むしろそのなかにいう「課役」免除の措置を直接の契機とするというように、部分的な齟齬はあるにしても、なおやはり「後」とのたがいの対応関係は動かない。この対応にもとづく構成、なかならず同じ助辞を介する対応的な筋の展開などは、所伝を文章のかたちに仕上げるにさいして加えた修辭上のたくみによるであろう。もちろん、個々の表現にも、そのたくみは及んでいる。四字句ないし六字句相互の対的な組みあわせを基調とするなかに、たとえば「悉雖<sub>二</sub>雨漏<sub>一</sub>、都勿<sub>二</sub>脩理<sub>一</sub>」という、その典型的な例がある。句の全体的な構成とそのなかの助辭にしても、対的なかたちの均整を視覚にうったえた例をみることができが、なおまた、意味のうえでも、前句の「悉」は、後句の、否定の助辭にかかつてその否定の意を強める——日本語にうつせば、まったく(し)ない——「都<sub>レ</sub>」とのいわば類義的な対応をもつ。ちなみに、「都勿」は、旧來のいわゆる正格の漢文にはみられない。そ

れだけに、これは、文章に整えるうえでの、すぐれて意図的な用字とみることができる。

そうして修辭にたくみをこらした例とは別に、しかし基調をひとしくするからであらう、ごくありふれた語ですら、同じように文章としての整いをかたちづくる。こうした例も注目値するが、その一例。

(1) 見<sup>4</sup>四方之<sup>3</sup>国<sup>3</sup> (詔之) 於<sup>3</sup>国<sup>3</sup>中<sup>3</sup>、烟<sup>3</sup>不<sup>3</sup>發<sup>3</sup>。国<sup>4</sup>皆貧窮<sup>4</sup>。

(2) 後見<sup>4</sup>国<sup>4</sup>中<sup>4</sup>、於<sup>4</sup>国<sup>4</sup>滿<sup>4</sup>烟<sup>4</sup>。

右の例文(1)(2)の対応からみて、「国」と「国中」とのあいだに意味におよぶ違いはない。二つをもつばらそのかたちの違いによって使いわけているのであるが、これには、次の二つの特徴的なあらわれがともなう。まずは「国」と「国中」とが交互にあらわれること、これは、文章の平板・単調を回避した結果とみなしうる。もう一つは、句の右傍に付した数字のしめすとおり、同じ字数の単位的なまとまり——語・句・文とそのありかたは区々ではあるが——相互の対応や四字句のなりたちなどに参与していること、これは、文章としての整いをかたちづくることにかかわる。いずれも、「国」と「国中」との同義的な関係をてこに、かたちの上でのその違いを利用したもので、たくみをこらしたとはいえないまでも、これはこれで、文章という表現のたくみがかかわるなかの、そのありかたにそくしたばかりであつたらう。

かくてこの所伝は、全体の構成はもとより、修辭のうえでも、たくみやはからいをすみずみにこらして成りたっている。右に指摘した例は、もちろん、その一部のあらわれにすぎない。そうした現象としても、また総じてこの所伝をつらぬく基調としても、文章としてのととのいをめざす傾向が著しい。この限りでは、この文章が漢文であること証すきめ手とはならないが、とはいえ、文章としてのととのいをめざすことは、漢文でかく、ないし漢文をかくば

あい、一つの規範としても、支配的な考えであつたはずである。

しかも、従来から、この所伝の文章は、『古事記』の中でもことに「純漢文体」の著しい例として定評がある。<sup>14</sup>ほとんど分析らしい分析も加えることなくそう認めてしまうのが常であるが、これに疑問がなかったわけではない。たとえば、宣長は、所伝中の「百姓之榮、不苦<sub>二</sub>役使<sub>一</sub>」について、

之榮は、之ノ字<sup>アノミヤリ</sup>衍なるべし「榮之を下上に誤れるかと思へど、書紀にこそさる之ノ字の用ゐざまは常の事なれ、此ノ記にはさる例をさく見えず」水垣ノ宮ノ段にも人民<sup>オホミタカラササキミナ</sup>榮とあり、さて此ノ句は、課<sup>コツガ</sup>を免されに係<sup>カ</sup>りて、次の句の役<sup>ニギミチ</sup>を免されし驗<sup>シルレ</sup>を云と、二ツなり、『古事記伝』三十五)

右のように「之榮」をとりあげ、「之」を衍字とみる。崇神天皇条の「天下平、人民榮」(中22ウ)になぞらえた見方であるが、忖度すれば、宣長は、句の全体を、日本語をうつしたものと捉えていたのではないか。「之」については、今日、これを「四字句に整えるための助辞か」(岩波思想大系『古事記』頭注)とみる見方もあるが、所詮は、字づらからの臆測にとどまるのではないか。そうして右の二つの見方をはじめ、注釈書のほとんどは、「百姓之榮」と「不<sub>レ</sub>苦<sub>二</sub>役使<sub>一</sub>」との句相互の意味的な相関についての顧慮を欠いているのではないか。

どのみち漢文か否かといった問題にゆきあたるが、ここであらかじめ結論をいえば、二句が漢文であることはもとより、そのなかの「之」も、衍字あるいは四字句に整えるための助辞などではなく、二句の漢文としてのなりたちに深くかかわる。呂淑湘氏は、この「之」を含む句を、そのあらわす意味をもとに四類に分ける。便宜、その標題と例文とを次に示す。

#### 甲 叙事句转成组合式词結

『古事記』の所伝のなりたちと漢籍

三子之不迁其业、非保守而不求进步之谓也。(有恒)

(2) 表态句转成组合式词结 ..

吾資之聰、倍人也、吾材之敏、倍人也。(为学)

例判断句转成组合式词结 ..

汉之为汉、几四十年矣。(论积贮疏)

(1) 有无句转成组合式词结 ..

象之有鼻、犹人之有手也。(汉语语法丛书『中国文法要略』84頁)

呂氏のもちいる術語をいま通常の文法用語にひきうつしてあらわすと、(卬)は、「三子不迁其业」という敘事文が、その主語と述語とのあいだに「之」が加わって名詞節に転成したもの(したがって、その「三子之不迁其业」を「三子之业」と同一形式にとらえる)ということになる。この名詞節は、「这里所加的『之』字、可说他的作用是取消句子的独立性。」と指摘するように、もはや文としての独立性を失っている。したがって、「三子之业」を「其业」にかえうると全く同じように、その「三子之不迁其业」を「其不迁其业」につくりかえることもできると説き、これについても、(卬)(1)のそれぞれに例文を示す。その(卬)の例文を代表として次に引用する。

(卬)大夫之许、寡君之愿也。若其不许、亦将见也。(左传)

呂氏の説によれば、この名詞節は、文中の成分として、

是作敘事句的起词(動作の起点をあらわす語——主語と重なる場合が多い) 和止词(動作の帰点をあらわす語——目的語と重なる場合が多い)、作表态句和判断句的主語和謂語(おおむね述語に相当する)。(同書119頁)

右のようにさまざまなかたちをとる。このほかに、

他又可以把表时间、原因等等小句改变成词组的形式作为补词、

(その一例) 大道之行也、天下为公。(礼记) 「大道行则天下为公、原为繁句、今将时间小句变补词…(及)

### 大道之行」

「补词」となるばあいもあるが、これについては「白话里没有的」という。なおまた「变次」(通常の語順からはずれた例、たとえば「宜乎百姓之谓我爱也」—孟子)や、時に「强调谓语的主要部分的一种方法」による、たとえば「寡人之于国也、尽心焉耳矣。」(孟子)なども指摘する。

呂氏の説は、あらまし右に概括したとおりである。このなかの、呂氏が分類・整理して示した各用例が、「之」のあらわれをほぼ尽くしているかに思う。ただ、呂氏は、この「之」を「句法的变化」のなかで取りあげ、そのほうの分析に主眼をおく。このためもあった、「之」自体の文法上の処理といった点では、かならずしもゆきとどいてはいない。「之」の用法に限れば、むしろ、

用在主语和谓语之间、形成「主语・之・谓语」的句式、可作句中主语、宾语、复句中的分句、语段中的句子。

(『古代汉语虚词通释』「之」807頁)

こうした簡潔な記述のほうが要を尽くしている。それにしても、問題は、どのみち各用例をどのように捉えるにかにかっている。さて、当面の所伝の中の例であるが、呂氏の種類にあてはめれば、仰以下の四類ではなく、時間や原因等をあらわす「补词」がそれにあたる。もっとも、右の『通释』では、その「补词」にあたるまとまりを、「表示时间等的短语」と「并列复句中的分句、或主从复句中的从句」とにわけける。すなわち、時間等をあらわすばあい(「可

译为……的时候等」は、その「之」によってなりたつ成分を「短语」とみなし、これとは別に、「起着加强语气、表示假设或连接分句与分句的作用」というはたらきを「之」がもつばあい、この成分を「句」とみる。たとえば、

〔語〕陈共公之卒、楚人不礼焉（《左传・宣公十一年》）——陈共公死时、楚国无礼对待。

〔句〕皮之不存、毛将安傅？（《左传・僖公十四年》）——皮都没有了、毛将依附在哪里呢？

同じ左伝の、構成もあい似た右の二つの文を例示するが、ここに成分の違いといった文法上の区別がなりたつのか、わたくしには疑わしい。なおまた、右の「句」の例を、その訳文から推しはかつて、「并列复句中的分句」とみなしていること、このことにも問題がある。くだんの例は、もともと不仲な秦と晋を皮と毛の關係になぞらえた比喻で、皮がないという既定の事実（兩國をむすびつける素地の欠如）をふまえ、毛（兩國の友和）などどこにもつきようがないというのがその内容である。かりに、そこに關係の意味をあらわす語を補うとすれば、たとえば「ダカラ」など是有力な候補たりうるであろうが、それはともかく、少くとも並列的な關係ではありえない。またそもそも「并列复句中的分句」といった見方がなりたつのか、このこと自体疑わしい。さて、しかしながら呂氏の「补词」が妥当であるのか、にわかには決めがたい。けれども、「之」によってなりたつ成分が、「句」であれ「語」であれ、その捉えかたのいかんにかかわらず、それ自体では独立性をもたず、下につづく成分にかかつて、そこになんらかの關係的意味をあらわすということ、これだけは、もはや疑いをいれない。

このなかには、「之」の成分が提示したことがら（いわば、一般）について、下につづく成分がその具体的ありかた（いわば、個別）を敷衍してあらわすという關係に抽象しうる例がある。その例。

鵬之徙於南冥也、水擊三千里。（莊逍遙游——引用は『馬氏文通校注』による。318頁。次の例も同じ。）



昔者聖王之治<sub>二</sub>天下<sub>一</sub>、参<sub>二</sub>其国<sub>一</sub>而任<sub>二</sub>其鄙<sub>一</sub>。（齊語）

五穀大夫之相<sub>レ</sub>秦也、勞不<sub>レ</sub>坐乘、暑不<sub>レ</sub>張<sub>レ</sub>蓋。（史商君列伝）

これらにあっては、一般と個別との位置関係を逆転することができる。たとえば「水擊三千里、徙<sub>二</sub>於南冥<sub>一</sub>」「参<sub>二</sub>其国<sub>一</sub>而任<sub>二</sub>其鄙<sub>一</sub>、治<sub>二</sub>天下<sub>一</sub>」などのような逆転が、表現上、ともかくも可能であり、そのようにしても、全体としてみれば、文意に大きな変更をきたさない。操作を加える以上、完全にもとのままではありえないが、それでも、右のようにかえうることに、このことに、この表現の特徴がある。また一方、一般からその一つの側面をきりとってあらわすという、この個別のありかたにかんがみて、個別を強調する表現であること、このこともまた明らかであろう。『古事記』のくだんの例は、これにあてはまる。「百姓之榮、不<sub>レ</sub>苦<sub>二</sub>役使<sub>一</sub>」というその四字句二つの相関は、一般と個別との関係に抽象できる。こころみにこの方向で解釈すれば、すなわち、人民が繁榮するということ「之」の成分が提示した事態について、下句が、その具体的なありかたを、役使に苦しむことがないというように敷衍したもの、あらまし以上のとおりである。

漢文であるか否かをめぐって論をすすめてきて、結句、漢文であること、それも右のような解釈におちつく。「之」にそくしていえば、それなくしては漢文たりえない、むしろ漢文としてのなりたちに必須の助辞である。なおここにもう一つ、漢文に特有な表現の例をとりあげてみる。さきに別の角度から言及したが、「悉雖<sub>二</sub>雨漏<sub>一</sub>、都勿<sub>二</sub>脩理<sub>一</sub>」のなかの「雖」がそれである。この助辞は、『馬氏文通校注』が多くの例をあげて指摘するように、

諸此雖、皆以領読、後各有<sub>レ</sub>猶<sub>レ</sub>、豈<sub>レ</sub>亦<sub>レ</sub>儻<sub>レ</sub>然<sub>レ</sub>、寧<sub>レ</sub>安<sub>レ</sub>諸字、以為呼応。（同書404頁）

（その例）

雖<sub>レ</sub>有<sub>二</sub>台池鳥獸<sub>一</sub>、豈能獨樂哉。(孟<sub>二</sub>上<sub>一</sub>) 雖<sub>二</sub>君之有<sub>二</sub>魯喪<sub>一</sub>、亦<sub>二</sub>敝邑之憂也<sub>一</sub>。(左<sub>二</sub>襄三十一<sub>一</sub>)

下に助辭がつづくばあい、これと呼応關係をもつ。實際は、「雖」をともなう成分とそれら助辭が導く成分との、成分相互のかかわりであるから、助辭をもって明示しないばあいも勿論あるが、「雖」をつかうばあい、その相關に一つの類型的なあらわれがともなう。すなわち、

虽然在后一分句没有表转折的虚词与<sub>レ</sub>虽<sub>二</sub>相呼应、但是在语意上常常是上句表肯定、下句就表否定、上句表否定、下句就表肯定。(『古代汉语虚词通释』「虽」541頁)

意味のうえで、「虽」をともなう成分が肯定をあらわすと、下につづく成分が否定をあらわし、その逆のかたちをとるばあいとあわせて、肯定と否定との背反する相關をかたちづくる。「雖」のあらわす逆接のその一つのあらわれではあるが、これはこれで、『通释』が指摘するとおり、この「雖」をめぐる類型的な表現にはかならない。『古事記』のくだんの例は、この類型にあてはまる。

右のように、所伝中の語や句について、その一部の語法や表現を検討しただけで、漢文であることの検証がすむわけではない。かといって、逐一の語句について同じような作業をつみ重ねたとしても、それでも、きめ手を欠くうらみはやはりつきまとう。どこまでもこころみの論にすぎず、そうした限定の上でということになるが、文章としての整いをめざす基調をげんに所伝のすみずみにゆきわたらせている以上、そのなかのわずかな例でも、かけねなしに漢文であることを示唆すれば、そこに、文章すなわち漢文という図式をよみとることができる。そうして、漢文をむねとしてこの所伝をあらわそうとしていたとみる限り、飛躍にすぎることはないであらう。文章としての整いは、その姿勢にともなう必然的なあらわれであつたはずである。

## 六、まとめ——所伝の新しさ——

かくて、この所伝は、漢文をむねとしてあらわし、それも、全体の構成をはじめ、修辭のうえでも、たくみやはからいを、それこそすみずみにこらしている。この、今われわれがみるかたちに整うまでに、どれほどの改修をへているのか、その詳細はもはや知るよしもないが、少くとも、さきにその一端について推測をこころみたように、改修が儒教の参与をとめない、所伝の内容にも及んでいることは疑いをいれない。漢文の文章としての整いは、この改修にさいしての、いわば内容にふさわしい文章や表現をめざすくわだてによるはずである。儒教の理想（聖帝世）をものがたる所伝である以上、その文章にはやはり漢文がふさわしいとする、それなりに自然な認識によるであろう。

さて、その内容であるが、歴史的な観点からこれをみれば、その新しさは著しい。たとえば、はるか後の、大化改新にさいして孝徳天皇がくだした詔（大化元年九月条）の次の一節にさえ通じる。

修<sub>ニ</sub>治宮殿<sub>一</sub>、築<sub>ニ</sub>造園陵<sub>一</sub>、各率<sub>ニ</sub>己民<sub>一</sub>、随<sub>レ</sub>事而作。易曰、損<sub>レ</sub>上益<sub>レ</sub>下。節以<sub>ニ</sub>制度<sub>一</sub>。不<sub>レ</sub>傷財、不<sub>レ</sub>害民。方今、百姓猶乏。（二五・223）

建築・土木の工事に役使する結果、人民が窮乏するという現状を指摘したなかに、儒教の考えにのっとり、上に立つ者がみずからを抑損して人民に利益をもたらすよう努めることを勧め、右に引用した部分のあとに、上に立つものの横暴を抑止する具体的な指示を与える。人民の窮乏を儒教の考えにそくして救済するという点で、その具体的な手だては違うものの、基本的には、仁徳天皇の「課役」免除の所伝に一致する。いいかえれば、この所伝は、のちの孝徳

天皇の時代がその政治の課題として取り組んだ問題を正面きってとりあげ、なおまた、その課題を解決するにあたって思想的なよりどころとした儒教のその同じ考えを下じにしているということにはかならない。詔のなかに引用する『周易』（益卦）の「損<sub>レ</sub>上益<sub>レ</sub>下」ということは、詔では、いわば政治の理念としてかかっているが、その「損上」は、所伝が筋の展開のうえできりわけ強調する天皇の生活上の忍苦に通じる。また一方、「益下」は、そうした忍苦をとおして実現した「於<sub>レ</sub>国満<sub>レ</sub>煙」あるいは「百姓之榮、不<sub>レ</sub>苦<sub>レ</sub>役使」に、そのままあてはまるであろう。

この双方の類縁をもつて、かりにこの所伝を孝徳天皇の時代に置きかえたとしても、素朴に過ぎるうらみはそれとして残るけれども、内容の上で破綻をきたすほどの不都合や矛盾はない。「課役」の免除にしても、さきにその例をあげたとおり、自然災害にともなうその救済措置として令に規定がある。ことほどさように、後の時代をさきどりする新しさがこの所伝にはある。

ところで、この所伝は、最後に「故称<sub>二</sub>其御世<sub>一</sub>、謂<sub>二</sub>聖帝世<sub>一</sub>也」というむすびを付す。所伝冒頭の「此天皇之御世」と呼応し、この所伝のそとわくをなすが、そこにいう「聖帝世」とは、所伝のなかの「百姓之榮、不<sub>レ</sub>苦<sub>レ</sub>役使」をうけて、これを実現した仁徳天皇の時代をたたえたものにほかならない。それはつまり、後の世のくだした評価である。この点、書紀のむすびは、「故、於<sub>レ</sub>今、称<sub>二</sub>聖帝<sub>一</sub>也。」（十一・298）というように「於<sub>レ</sub>今」を明記する。『古事記』の序文また同様で、「望<sub>二</sub>烟而撫<sub>二</sub>黎元<sub>一</sub>。於<sub>レ</sub>今伝<sub>二</sub>聖帝<sub>一</sub>」とある。この所伝にしても、明記しないだけで、含みとしては、もちろん「於<sub>レ</sub>今」がある。そうして「於<sub>レ</sub>今」の時点から、さかのぼって、書紀や記序が天皇その人をたたえるのとは違い、これは天皇の時代をたたえたもので、所伝自体も、天皇の伝記というより、むしろ歴史における一コマ、いいかえれば、仁徳天皇の時代のそのありかたをものがたろうとする用意のもとに成りたっているはずである。

そうである以上、所伝の新しさとは、ひっきょう、そこにものがたる時代の新しさにほかならない。下巻のあらゆる所伝にききだつて、その口火をきる位置をしめるこの所伝は、その意味において、新しい時代の幕あけを告げるものである。具体的には、儒教がおもてむき政治や行動の規範となったということである。もとより、政治や行動のすべてを律するというほどではないにしても、事あるばあいの、そのことの次第によっては、規範として仰ぎ、また依拠するものとして儒教が確實にその地歩をしめるに至ったということである。神に、たとえばその意向を問うというかたちで頼る素朴は、ここにはもはやない。

下巻は、こうして仁徳天皇の「課役」免除をめぐる所伝が道をつけた、いわば新しい時代の所伝を特徴にもつであらう。それらにあつては、儒教はもとより、漢籍の知識などが、新しい時代のそのありかたをあらわすうえで、さまざまなかたちをとつて所伝のなりたちに参加していることを、もはや容易に見とおしうる。げんに、くだんの「課役」免除の所伝につづく大后・石の日売の嫉妬をめぐる所伝は、別稿に指摘したとおり、その見とおしを確實に裏づける。(以下別稿につづく)

#### 註

- (1) 西宮一民氏校注『古事記』(新潮日本古典集成)の「解説」(298頁)
- (2) 出典とみなしうる原拠は、漢訳仏典以外には、ほとんどみるべきものがないという小島憲之先生の指摘(『古事記と中国文学』『上代日本文学と中国文学』上)がある。今日でも、おおかたこの説を出ない。なお、田所義行氏に『儒家思想から見た古事記の研究』と題する著書があるが、小稿に益するところはない。
- (3) 本文は、検索の便宜にしたがい、高木市之助・富山民蔵編『古事記総索引』本文篇による。丁数も、それによって表示する。本文に特に大きな異同はないが、ただ「役」を「役」に改めたので、これについてここに言及しておく。「役秦人」「課役」の

「役」については、どの注釈書も異同にふれない。最近の注釈書（岩波日本古典文学大系本・岩波日本思想大系本・新潮日本古典集成本）は「役」につくるが、それでも「思想大系本」では、頭注の説明のなかに「役」を使うなどの混乱がある。『古事記伝』は「役」につくる。古い諸本に逐一あたるもの手順の一つではあるけれども、真福寺本（これを底本とする『校本古事記』は「課役」につくり、一切校異を付さない）にしても、それほど古くはさかのぼらないので、これは省き、令（賦役令）の条文をみるに、唐令（『唐令拾遺』による）、日本令（『註解養老令』・日本思想大系『律令』による）ともに「役」につくる。ただこの古い注釈では、『令集解』が「役」を使い、『令義解』が「役」を使う。一方、『万葉集』によると、三八四七番の歌に「課役徴者」とあり、これには異同がない（『校本万葉集』）。いまにわかにいずれか一方に定めるきめ手を欠く。しばらく「役」にしたがう。

- (4) 漢数字は書紀の巻次を、また算用数字は新訂増補国史大系『日本書紀』の頁数を、それぞれあらわす。なお本文は、おおむね日本古典文学大系『日本書紀』による。小稿に引用した本文中に、とくに注すべき本文の異同はない。

- (5) 日本古典文学大系『日本書紀』下の当該条の頭注に、「黼衣縫履」以下「従事手無為」までは、「六韜に拠って作った文であらう」という。

- (6) この一文は、全体に『漢書』卷四「文帝紀」の次の一節に類似する。

風雨和時、百穀用成。衆庶業業、咸以康寧。

- (7) 「課役」が「雜徭」を含むか否かについて、「大宝令」と「養老令」とでは、その扱いに違いがあったらしく、日本思想大系『律令』の補注（587頁）には、それについての解説がある。

- (8) この記述は、『史記』卷二十九「河渠書」の次の一節を参考に修文している可能性が濃い。なお註(9)参照。

渠就、用注填闕之水、溉沃野之地、四万余頃、收皆畝一鐘。於是、関中為沃野、無凶年。

- (9) この「狂人渠」の所伝について、小島憲之先生前掲書（30頁）は、「文辭の比較よりみて、西都賦李善注を手本にしたことは確実である。」と指摘する。岩波日本古典文学大系『日本書紀』の当該条の頭注でも、その李善注（所引の『史記』の一節）を引用するが、ここは『史記』に直接よったのではないか。『史記』「河渠書」には、諸処の治水事業に役使した人夫をおおむね「数万人」と伝える。李善注は、この肝腎な数字を欠く。なお注8参照。

- (10) 「部曲」はそのいくつかを「亦」でつなぎ、「役使」は「又」でつなぎ、おのおの別箇一まとまりとして記述する。

(11) 唐律(『唐律疏議』卷五「名例律」)に、誤判によつて徒役に処した者を更正する手だてとして、課役の免除を規定した条文があり、その疏議のなかにも「若普蒙恩復<sub>二</sub>及遭<sub>三</sub>霜旱、依<sub>レ</sub>令課役並免。」という。

(12) 『芸文類聚』卷五十二「善政」にこの『家語』の一節を収録する。また『文選』卷三「東京賦」には、「賦政任役、常畏<sub>二</sub>人力之<sub>レ</sub>尽也。取<sub>レ</sub>之以<sub>レ</sub>道、用<sub>レ</sub>之以<sub>レ</sub>時。」とある。一方、『漢書』卷四「文帝紀」の「賛」では、帝が生活その他万般にわたつて儉約を勵行して「有<sub>二</sub>不便<sub>一</sub>、輒弛以利<sub>レ</sub>民」と伝える。

(13) 『古代汉语虚词通释』は、この「都」について「用在<sub>二</sub>不<sub>レ</sub>或<sub>二</sub>无<sub>一</sub>前、作<sub>二</sub>都不<sub>一</sub>、都无<sub>一</sub>、表示<sub>二</sub>一点儿也不<sub>一</sub>……」と説く。

(14) 福田良輔氏「古事記の純漢文的構文の文章について」(『古代語文ノート』288頁)。

(15) このような捉えかたは、すでに『馬氏文通校注』(316頁)にみえる。なお、王力氏は、『漢語史稿』で、「句子的仿語化」(第四十五節)のなかに「(一)介詞<sub>二</sub>之<sub>一</sub>字使句子結構變為仿語結構」という一節をたて、この「之」を含む成分を「名詞性仿語」と説く。論文では、語史の観点から詳細にこの「之」に分析を加えた「汉语表自指的名词化标记」(王洪君氏『語言學論叢』第十四輯所収)がある。

(16) 「易曰」以下については、日本古典文学大系『日本書紀』の当該条の頭注に「魏志」の一文を引用する。

(17) 『古事記』の所伝のなりたちと漢籍——仁德天皇条の所伝をめぐって、その(一)——『仏教大学大学院紀要』第十六号

